

岡崎市議会議長 様

支出番号

12

会派名

自民清風会

代表者名

加藤 義幸



下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書


令和2年 3月 25日提出

活動年月日	令和元年 8月 5日 (月) ~ 8月 6日 (火)	
氏名	杉浦久直	
用務先 及び 内 容	1 8月5日	用務先 滋賀県 大津市
		内 容 令和元年度 世界情勢からわがまちの未来をつくる ~トップマネージャーの方のために~
	2 8月6日	用務先 滋賀県 大津市
		内 容 令和元年度 世界情勢からわがまちの未来をつくる ~トップマネージャーの方のために~
	3	用務先
		内 容
	4	用務先
		内 容
備考		



調査研究（研修）視察報告書

報告者：杉浦 久直

視 察 日	令和元年8月5日（月）～6日（火）
視 察 内 容	令和元年度 国際文化研修 世界情勢からわがまちの未来をつくる
視 察 者	杉浦久直
<p>1日目</p> <p><講義1> 国際情勢の変化と自治体の役割—不寛容の時代と人の移動 講師：前駐ポーランド大使（現国際研修協力機構常務理事） グローバルイゼーションのこれまでの歩みを振り返り、現在世界で起きつつある、ポピュリズムなどの政治問題と、産業の空洞化などの経済問題を概説し、企業が低賃金の海外へ投資してきた流れが、外国人労働者の先進国への流入という流れになる中、日本も人手不足を背景にさらなる受け入れへと舵を切る今、地方自治体の役割とは。</p>  <p><講義2> 外国人労働者の受け入れと地域社会 講師：明治大学国際日本学部教授 日本に外国人材を受け入れる新たな在留資格として特定技能が創設されたが、そこに至る国の取り組みの背景と経緯。地域において、外国人と共生していくための多文化共生の地方自治体の取り組みの推移。先行した自治体の動きを受けての、国の多文化共生の取り組み、教育における多文化共生。外国での地域における多文化共生。多文化共生の第2ステージの多文化共生2.0の時代へ。</p> <p>2日目</p> <p><講義3> アジアの人々から見た日本の魅力 講師：関西学院大学商学部教授 日本企業のアジア進出は失敗の歴史、アジアの消費者の理解が間違っている。では訪日客へのアピールは？同じモノが国境を越えると、全く異なった「意味」や「価値」となる。→商品（風景）に価値は内在せず、消費者（訪日客）が決める。意味（価値）を決めるのは個人+社会（制度もしくは暗黙知）。人々が共有する暗黙知は地域と世代で異なる。</p> <p><講義4> SAKE からみる地域の活力 講師：株式会社南部美人 代表取締役 蔵元 久慈 浩介 氏 木下酒造有限会社 常務取締役 岩手県二戸市の日本酒の蔵元と京都府京丹後市の酒蔵の杜氏の両名による、日本酒の歴史や特徴、地方創生、地域資源としての地酒、インバウンドや海外への展開など、それぞれからの講話と対談など。</p>	

〔感想・岡崎市への反映〕

講義1に関して、グローバル化の近世から現代までの、国家と市場の関係からの概略を、政治史、経済史の部分で、特にヨーロッパを中心としてわかりやすく解説いただいた。また、そこから、外国人労働者の受け入れに伴う、現代の各国が抱える諸問題へと通じる状況についても、多面的な視点で解説を受けた。日本において、技能実習制度による受け入れから、特定技能による受け入れへと拡大していく中で、どういった分野にどの国から人材を受け入れていくことが想定されるか、そうした中で、これからの地方自治体の果たすべき役割について考えさせられた。

講義2に関して、具体的な自治体の事例や、国の制度なども紹介され、多文化共生に取り組む事例や制度について、よく知ることができた。また、特に教育についての重要性を改めて認識した。特定技能制度などにより、今後さらに長期間にわたり日本に滞在、定住する外国籍市民や、ルーツを外国に持つ市民の増加が想定されるが、日本語能力を高める教育とともに、「やさしい日本語」の普及も必要であるし、また、医療や防災の面での多言語対応もまだまだ課題が多い。そして何より、地域社会での地域住民との共生へとつながる地域づくり、お互いの交流促進が重要であると感じた。

講義3に関して、マーケティングの視点から見た、アジアにおける消費者像、商品の価値を決めるのは買い手。そこで、インバウンド拡大を目指す地域が売りたい商品（観光）と、訪日客が見出す価値の差が発生する。ではインバウンドの拡大を目指す地方はどうすべきか。消費者の暗黙知（嗜好）を知っているプロフェッショナルにまかせることも手かもしれないが、狙いとする層の影響のある消費者に訪訪してもらい、その価値観の視点で評価してもらおうとともに、情報発信力に期待するという戦略を岡崎市はとっていると理解している。その方向性で間違っていないと思うので、今後の発展を期待したい。

講義4に関して、近年、日本酒が見直され、多様な銘柄がその味を競っているが、それぞれの地方の蔵元が特徴的な酒造りに励んできたことで、国内での人気や、海外への進出がある。それでも、なかなか杜氏などの仕事が報酬に比してキツイ実態のようである。イギリスにおいては、食品輸出の4割がスコッチウイスキーで、その生産量の9割が輸出用とのことであり、海外への展開もまだまだこれからの部分があるが、海外での日本酒（清酒）の生産も増加してきており、味に親んでもらえばこれからの伸び代が大きいとも言える。また地方創生での地元の蔵元の価値の再発見、観光やインバウンドでの消費もそれぞれの蔵元の魅力を向上させることが重要である。岡崎市は2軒の造り酒屋があるが、行政としても協力できる部分はまだあるのではないだろうか。

今回の研修では、全国から50名弱の市町議会議員や首町などが参加する中で、お隣の幸田町の副町長が参加されていた。聞いたところ、幸田町からJIAMに職員を出向させている関係で来ているとのことであった。岡崎市の職員においてもそうした機会があれば、非常に勉強になり、本市の将来を担う人材となると思われるので、人事部局において検討いただきたく感じた。